

第 44 回 IATEFL 大会に参加して

神保 尚武 (JACET 会長、早稲田大学)

IATEFL (International Association of Teachers of English as a Foreign Language) の第 44 回大会が 4 月 7-11 日に英国の Harrogate で開催された。列車でロンドンからヨーク経由で 3 時間ほどの行程であった。

7 日には Associates' Day が開催され、85 提携学会から、50 名以上の参加者があった。各学会がかかえる問題、特に財政的基盤の脆弱さについて多くの時間をさいて議論がかわされた。なお、IATEFL の website で Associates の情報が得られるので、JACET も大会等の情報を掲載していきたい。

大会のプログラムは多彩であった。7 日は Pre-Conference events で、Business English, ESP, Learner Autonomy, Learning Technologies, Literature/ Media & Cultural Studies, Teacher Training & Education, Testing/Evaluation & Assessment, Young Learners & Teenagers 等の SIG のセミナーが開催された。

8 日から 11 日までの 4 日間にわたり基調講演、研究発表、実践的ワークショップ、シンポジウムなどが行われた。最初の基調講演は前会長の Tessa Woodward (Hilderstone College, UK) で “The Professional Life Cycles of Teachers” という演題であった。教師の成長について新任教員から退職するまでの各段階で遭遇する問題点を論じた。2 日目の基調講演は、Kieran Egan (Simon Fraser University, Canada) の “Students' minds and imaginations” であった。学習者の認知発達の過程に関するもので、想像力がいかに重要な役割を果たしているかが焦点であった。3 日目の基調講演は Ema Ushioda (University of Warwick, UK) の “Socializing students' motivation and autonomy in the English language classroom” であった。潮田先生は名前から想像できるように、両親は日本人であるが、アイルランドに生まれ育った。動機は外部から与えられるよりも、内発的なものの方が重要であることが強調された。その内発的な動機の成長を媒介するものは社会的過程であることに焦点があてられた。

発表で注目されたものを 2 件取り上げる。まずは、Penny Ur (Oranim Academic College of Education, Israel) の “Teaching Grammar: Research, theory and practice” である。文法の研究、理論、教育実践の連携が明確に提示された。次に、Adrian Underhill (Study Group, UK) の “Coaching in practice: Supporting the self-directed change of others” である。コーチ(メンター)の役割はあくまでも、教職志望学生や新任教員の自律的变化・成長を促すことであることが強調された。

なお、JACET 大会や夏季セミナーの講師をされた Peter Grundy, Andrew Cohen, Simon Borg 先生と再会できた。